長洲町立長洲小学校　校長便り　№１６１

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和６年３月４日(月)

中学校～教科担任制～

中学校に入学すると、小学校とは違った学習形態に戸惑うことがあります。私もそうでしたが、教科によって担当の先生が代わることは、新鮮でもあり戸惑いもありました。といいますのも、それぞれの教科によってあいさつの仕方も違いますし、連絡の方法も違います。宿題の量や種類も違います。中学校で授業が始まると、初めのうちは、流れに慣れるのが大変でした。そのうち、それぞれの先生方の個性を感じるようになり、その中に楽しさを覚えるようになってきました。また、先生方のくせや何気ない仕草に、親しみを覚えるようにもなります。そのような先生方と、個人的にお話をする機会がきっかけとなって、その教科が好きな教科になったり、得意教科になったりします。中１当時の私の得意？とはいえませんが、どちらかというと点数が高かったのは英語でした。英語の先生は、恥ずかしがらずに声を出していた私に、よく声をかけてくださいました。ちょっとしたことがきっかけで、グンと伸びるのも中学生の特色かも知れません。子供達には、中学入学後早く生活に慣れ、学習と部活生活のリズムを確立してほしいです。

【愛語録】

数年前、教育実践を文章にまとめていた時、出会った言葉です。

「なんのために実行するのか、
ビジョンがなければ、
効果があるはずがない。」

（元キャノン社長　賀来龍三郎氏）

毎日、一所懸命頑張っていることは素晴らしいことだと思います。しかし、もっと素晴らしいことは、その一所懸命やっていることが、他人のため、世の中の人のため、多くの人の幸せのためになるものに向けて発揮されることだと考えるようになりました。というのは、私が担任をさせて頂いていた頃の実践を振り返ってみると、かなりの割合で「自己満足」の実践が多かったなぁと感じるからなのです。そこにはビジョンがなく、ただ一所懸命やっている自分の姿に酔っていただけなのではないかという反省があります。ただ、反省ばかりではありません。あの実践はビジョンを持った実践だったと思うものも多くありました。そのような実践は今でも教え子達が語ってくれます。そして、そのビジョンに向けて努力し、頑張ることで、自分自身の違う甲斐も大きくなるし、仕事の方向性もよく見えていたように感じます。逆にビジョンがないと、同じところを行ったり来たりし、ある時は悪い方向へ行ってしまい、「こんなに頑張っているのになぜ…」という負のスパイラルから疲弊してしまいます。ビジョンをしっかり持ち、日々のチェック、振り返りによって、次にやることが見えてくると思います。その積み重ねが、仕事の成果を上げていき、ひいては人生の質（ＱＯＬ）を上げることに繋がるのではないでしょうか。学校現場での実践は「人づくり」なので、特にビジョンを持たなければ失敗するように思います。だからこそ、私は成功体験に惑わされないように自分自身を振り返るようにしています。

シリーズ「自分を語る」＃１６１

さて、校長１年目の中島小学校での生活は中々に刺激的な時間となりました。何といってもコロナ禍元年といってもいい年ですからね。ズームによる会議についてはバックナンバーでも少し紹介しました。その他にも幾つかありました。

先ずは、「在宅勤務」です。これまでも一般企業や個人事業者の皆さんが、パソコン上でできる仕事やメールのやり取り等々、自宅でできる業務に取り組まれていたことはご存じの通りです。しかし、学校現場で在宅勤務という言葉が使われるとは思いもよりませんでした。よくよく考えてみると、子供達のいない学校現場において、業務として何ができるかということを考えると数多くありました。ましてや、１人１台のパソコン、タブレット端末が整備されている状況の中ですから、アイデア次第で多くの仕事ができますし、多くの研修にも参加できます。当時の世の中は外出も自粛すべきという雰囲気もありましたので、研修もままならない状況でした。熊本市はＩＣＴ先進地域ということで、全国的にも多くの業務や研修がＩＣＴを活用し、在宅で勤務が出来るようになっていったと思います。

これに伴って、というより、当然のように学習そのものもオンライン化されていきました。６月まで休校が続いたと以前書きましたが、３月から５月まで何もしないでいたら子供達の学習はストップしてしまいます。学びを止めないためにも、ここでもズームが活用されていきます。当時、「遠隔授業」と言っていたような気がします。私自身、とんでもない世界に踏み込んでしまったものだと、かなりショックを受けたことを思い出します。アニメやＳＦで行われていたような世界が、現実の世界で行われているのですからね。授業様子を見に行くと、若手の先生、中堅ベテランの先生関係なく、ズームを使って出席を確認したり、家庭で授業を受ける子供達に対して挙手を求めたり、発表を求めたりしているのです。未来の学びと思っていたことが目の前で展開されていて、「こんな時代がくるとは…」と真面目に思った澤田でした。

次にお話しすることは、「行事（活動）について見直す」という機会が多くなったということです。コロナ禍元年、どんな活動をするにしてもとにかく感染拡大防止が最優先だったのですが、それに伴って、「どうすれば感染予防ができるか」、「感染のリスクが高い行事をどうするか」、「そもそも必要な行事（活動）なのか」、「どうすれば実施できるか」という、４つの視点をスクリーンとして行事（活動）を見るようになりました。これは現在、「働き方改革」の視点としても意識していることです。これによって、多くの行事が改革されていったということは、ある意味コロナ禍によるプラスの影響だったといえるでしょう。改革が良かったか悪かったかは別として、運動会の短縮、幾つかの行事の削減、参集型行事の改革等が実現していきました。印象的な行事として学習発表会があります。１２月実施だったのですがまだまだコロナ禍の真っ最中で感染者の報告も多く、発表している子供達と参観する保護者の皆様との間に、十数枚のビニールシートを設置しての発表でした。結構な数いでご意見を頂いたことが今では良い思い出になっています。（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）